廣嶋縣史談

全

KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Kodak LICENSED PRODUCT
Inches Centimetres

30071
教科書文庫
3
210
32-1898
25000
28311
M31
1898

明治三十一年十二月二十八日
文部省檢定濟
高等小學校歷史科生徒用

森田保之編

廣嶋縣史談

全

廣嶋　積善館藏版

廣島縣立東雲分館圖書之印

登録番号 28311
分類 375.73 M

廣島縣史談

緒言

一　本書編纂の旨趣は、縣下高等小學校第一學年の生徒に、鄉土に關する史談の大要を知らしめ、歷史上の觀念を啓きて、忠君愛國の基礎を作るを本旨とす。

一　編纂の方法は、全篇を三章に分つ、即ち第一章は兒童の境遇に適する、己のこと、一家のこと、學校のこと等を說き、第二章は本縣内の事蹟を記し、第三章に於て概括せり。

一　本書は、生徒用の爲に編纂せしものなれば、記事の簡單にして、行文の近易なるは、編者の殊に注意せし所なり。

一本書は前半期間の教授週數、凡そ二十週間に修了せしむべき目的を以て編纂せり。

一本書を編纂するに當り、事實の正確を希圖せしが故に、其引用したる書は、實に數十種の多きに上り、尚ほ各地在住の人士百有餘名の補正を受けたり。

一編纂の順序及び文章等は、教育專門家の意見校正を煩はしたり。

一書中の圖畫は、精査考覈を究め、之を名手に囑して製せしめぬ。其背僊景色等、一も杜撰あることなし。

明治三十一年三月　　編者識

秋吉文庫藏

廣島縣史談目次

第一章
歴史
履歴
家の歴史
學級の歴史
學校の歴史
學校近傍の歴史
第二章
神武天皇
神功皇后
平清盛

秋吉文庫藏

櫻山慈俊
毛利元就
廣島城
福山城
本莊重政
宮崎安貞
唐崎常陸介
頼山陽
日清戰爭
第三章
總說
附歷史年表

廣島縣史談

廣島　森田保之　編

第一章　歷史

歷史とは、昔より、世の中にれこり來たれる、種々のことがらを、記したる、かきものなり。

履歷

君の生れしは、幾年幾月幾日なりしか。又はじめて學校に入りしは、何時にして、其學校は何と云ひしぞ。尋常小學を卒業せしは、何時なりしか。其

他、君の生れしより、今日まで、身の上につきて、いろいろの事のありしならん、これを君の履歴といふ。これを記したるものは、即ち君の履史にして、また履歴書とも云ふなり。

家の履史

君の家の先祖は、何と云ひ、其人は、いかにして、家をおこしゝか。又君の家は、いかなるうつりかはりを經て、今日のありさまに至りしか。此等のことをば、各、その父母につきて問へ、種々のおもしろき事もありぬべし。此の如き事を記せるもの

を、家の履史といふ。

學級の履史

此學級のはじまりしは、何時にして、其時の生徒數は、幾人なりしか。又其後如何なるうつりかはりありしか。現今の受持教員は、何と云ひ、生徒數は幾ばくありや。此等のことを記せるを、學級の履史といふ。

學校の履史

君等に本校の履史を、左の事柄につきて、一々話しきかせん。

學校名　位置　はゞめて建てゝ年月日　其後のうつりかはり　現今の生徒數

現今の學級數

學校近傍の歴史

君等に學校近傍の歴史を、左の事柄につきて、一一話しきかせん。

土地のうつりかはり　城趾　神社　寺院　人物

第二章

神武天皇

神武天皇と申し奉るは、今上天皇の御先祖にして、凡そ二千五百年前、わが日本ををさめ給ひし、第一代の天皇なり。

神武天皇は、初め日向國に都し給ひ、其頃西國は、よく治まりしかども、東國はいたく亂れ、所々に力強きわるもの居りて、良き人民を苦めしかば、天皇之を平げんとて、皇族をしたがへ、數

多の兵士をひきゐて、日向を出で給ひ、海をわたりて、安藝國埃宮に著き給へり。此埃宮は、今の安藝郡府中村にありたるにて、その多家神社は、即ち神武天皇をまつり奉るなり。

備後國沼隈郡水呑村一說に備中國小田郡高島なりと云ふ

天皇しばらく、此地にとゞまり給ひ、更に高島宮に進ませられて、又こゝにとゞまり給ふこと三年、船をつくり、兵食をたくはへて、大に御軍の用意をなし給ひき。既にして再び進み、大和國に入り給ふ。大和には強きあるものゝかしら住みてはげしく御軍をふせぎければ、天皇道をかへて、紀伊國より入り、遂にこれをうちほろぼし給へり。かくて天皇大和國橿原の宮にて、御位につき給ひき。此年を紀元元年とす。毎年二月十一日は、此御即位の吉日に當るを以て、紀元節として祝ひ奉るなり。又四月三日は、崩御の日にして、神武天皇祭の日なり。此日多家神社に參詣するもの甚だ多し。

神功皇后

神功皇后と申し奉るは仲哀天皇の御后なり。天皇の御時、筑紫（今の九州）の熊襲をむきしかば、天皇御み

づから大將となりて、征伐に向はせ給へり。ついで御后も筑紫に下らせらる。其途中鞆浦（沼隈郡）に御船をよせさせ、大綿津見命をまつりて、海上の無難をいのり給ひ、又糸崎（備後國御調郡）御手洗（安芸國豊田郡）樽鼻（同國佐伯郡）等へも、御船をよせさせ給ひきとぞ。かくて熊襲

の勢甚だ強くして、未だ平がざる程に、天皇御病氣にて、かくれさせ給へり。

皇后は、智恵ふかく、勇氣も人にすぐれさせ給ひしに、かく熊襲の勢強きは、新羅國（朝鮮國の一部の古名）のたすけを、たのめるものとや、思召されけん、天皇のかくれさせ給ひしことを、世にかくし置き、まづ新羅を伐たんとて、御身を男子にやつし、數多の兵船をしたがへて、其國に向はせ給ふ。新羅王大に怖れて、御船のまへに降參し、高麗・百濟の二國も降りぬ。こゝに於て、其國より多くの品々を獻り

ければ、數多の船にのせて、歸らせ給ふ。これより新羅・高麗・百濟の三國は、永く我國にまたがひけり。此三國をば又三韓と稱ふ。即ち今の朝鮮の地にあり〳〵國々なり。皇后の御征伐は、實に紀元八百六十年のことにして、熊襲もまたをむのずなりぬ。

是より學問及び藝術など、三韓より傳へ來て、我文明を助けしこと多かりき。かくて皇后歸途再び鞆に御船をよせさせ給ひ、鞆ををさめて、又大綿津見命をまつり給へり。よりて此地を鞆と稱ふることゝなれり。

鞆の沼名前神社は、神功皇后の、大綿津見命をまつり給ひしが始めにて、其後渡守神社と稱へしを、明治の初め、其地の祇園社を改め造りて、渡守の神を合せまつり、再び沼名前神社と稱ふるに至れり。現今の祭神は、大綿津見命と素戔嗚命とにして、國幣小社たり。

平清盛

平清盛は、忠盛の子なり。久安二年（紀元千八百六年）安藝守となりしに、深く市杵姫命を信じ、しばく嚴島神

社に參詣し、社殿を改め造りて、世に稀なる神社とはなしぬ。又穩戸の瀨戸は、安藝郡警固屋村と、瀨戸島とをつらねたる地峽なりしを、清盛之をほりまりて、舟路の便をそのりたり。後の人、其功を傳へんとて、海中に清盛の碑を立てたりき。

清盛しばゝく武功をあらはし、勢朝日ののぼるが如くにして、遂に太政大臣となり、子弟・親族、皆高官にのぼり、我儘をきはめければ、世の人漸くこれをにくみしに、源頼朝兵をあげて、平氏を倒さんとするに及び、源氏の勢たちまち盛んになりぬ。清盛之を憤りて、心を安んずること能はず、終に病にかゝりて、薨じたり。

嚴島は、舊と恩賀島と云ひしを、市杵姫命をまつりしより、伊都岐島と云ひ、後又嚴島と稱せり。其神社は、千三百年前、佐伯氏のはじめて立つる所

にして、平清盛其規模を廣大にせり。後安藝國の領主、大内・毛利・福島・淺野氏等も、しば〳〵社殿ををさめられ、今は國幣中社たり。明治十八年七月、天皇陛下行幸あらせられ、同じき二十八年四月、皇后陛下も行啓あらせ給ひき。

櫻山茲俊

櫻山茲俊は、備後の人にて、忠義の志あつかりき。後醍醐天皇の、北條高時を伐ち給ひし時、楠正成勤王の兵を起しければ、茲俊も亦兵を擧げて、官軍に應じ、蘆品郡の一宮（吉備津神社）に據れり。（紀元千九百九十二年）既

にして茲俊、備後の半すぎまで切りしたがへ、勢盛んならんとしたりしに、たま〳〵正成自殺して、軍兵四方に去りぬと聞こえしのば、茲俊事の成らざるをなげき、遂に一宮を燒き、妻子を殺して自殺せり。明治十三年、有志者相はかり、社を蘆

櫻山四郎入道茲俊

貴重書藏版

品郡櫻山に建てんとするに及び、朝廷、金百圓を賜はりて、其費用を助けられ、同じき十六年に至りて神社落成す、朝廷正五位を贈られたりき。

毛利元就

毛利元就は、高田郡吉田の人なり。幼き時嚴島神社に參詣せしことあり、從者の神に祈りしを見て、汝は何事を祈りしぞと問ひければ、從者は君が成長の後、安藝國の主となり給はんことを祈れりと答ふ。元就なぞて天下に主たらんことを祈らざりしぞ、凡そ事は、大をねがひて、小を得るがならひなりと、いはれきとぞ。

元就初は長門・周防の國主大内氏に屬し、漸く武功を積みて、其領地をひろめたり。既にして大内氏の臣、陶晴賢叛きて、義隆を弑しけるとき、義隆書を元就に遺りて、此怨を報いんことをたのみたり。元就やがて賊を討たんことを朝廷にねがひ、詔を得しかば、城を嚴島に築きて、敵を誘ひけり。晴賢果して兵三万を以て、之を攻め取りければ、元就、風雨はげしき暗夜をはかり、兵三千を率ゐ、急に嚴島に渡りて、大に敵を破りければ晴賢

遂に自殺せり。これ弘治元年（紀元二千二百十五年）のことなりき。是より元就の名、中國に著れたり。其後出雲の尼子氏を攻むること、七年にして之を亡し、遂に山陰・山陽の十三個國を領するに至りぬ。

元就は、深く朝廷を尊ぶたる人にて、其頃は、正親町天皇の御世なりしに、朝廷いたく衰へて、御即位の儀式すら、行はせざりしを、元就多くの金を獻じて、御入用をたすけ奉りけり。されば朝廷にても、其功を賞して、菊桐の御紋章を、下し賜はりきとぞ。

吉川元春　毛利元就　小早川隆景

元就死するに臨み、子息を呼び集め、一束の矢を折るべしとて、之を出だしゝに、能く折る者なかりしかば、更に之を解きて、一筋づつ折らしめて云ふやう、汝等之を見よ、共に合ふときは折れ難く、互に離るゝときは折

れ易し、吾死したる後、汝等心を一にして、力を合はせよと、さとしたりといふ。

元就死して、孫輝元つぎ、叔父吉川元春・小早川隆景共に心を合はせて、之を助けゝれば、織田・豐臣二氏の、相つぎて盛んなるに當り、能く其國を失はざることを得たり。

元春は元就の第二子にして、吉川氏をつぎ、隆景は第三子にして、小早川氏をつげり。元春勇武を以て著はれ、隆景智謀すぐれたれば、共に軍功おほく、世に之を毛利の兩川といひき。秀吉の朝鮮

を伐ちし時、元春既に世を去りしかども、隆景は一軍に將として、大に明軍を破りしは、名高きことにて、明主の和を請ひしも、之が原なりきとぞ。後に備後の三原城に隱居したり。

廣島城

廣島城は、天正十七年、紀元二千二百四十九年毛利輝元の築きしものにして、其大いなること、實に中國第一たり。初め輝元、祖父元就の後をつぎて、吉田の郡山城に在りしに、便利ならずとて、此地に築きて移りたり。其後また長門・國萩城に移り、福島正則此城

に來たり居りしかど、久しからずして、家ほろび、淺野長晟代りて入城し、それより二百五十餘年の間淺野氏代々の居城たり。明治維新の後、廣島鎮臺をおかれ、後第五師團の衛戍地となりぬ。明治二十七年日清戰爭のおこれるや、九月十五

廣島城

日、大本營を此處に進められしより、同じき二十八年四月二十七日まで、畏くも今上天皇陛下御とゞまり遊ばされたりき。

淺野氏は、源頼光の後にて、長政に至り、豐臣秀吉につかへたり。子幸長朝鮮征伐の時、加藤清正と共に蔚山の城を守りて戰功あり。關原の戰には、德川家康をたすけぬ。幸長卒して弟長晟つぐ。元和五年、（紀元二千二百七十九年）領地を移され、安藝及び備後の半四十二万六千石を領しけり。六代を經て重晟に至る。重晟賢明にして文武の業を勵まし、節儉を

行ひしかば、財務大にとゝのひたり。又賴春水・香川南濱等の學者を用ひぬ。此より五代を經て、長勲に至り、明治維新となりければ、領地を朝廷にかへし奉り、猶ほ朝命によりて、藩の政事をきゝしに、明治四年東京に移り、華族に列して、侯爵に叙せられたり。

饒津神社は、淺野長政をまつれる社にして、文化七年（紀元二千四百七十年）之を建て、後改め築き、今は縣社となれり。

福山城

福山城

福山城は、元和五年、（紀元二千二百七十九年）水野勝成の築きしところなり。水野氏此城に居ること、五代八十餘年にして、松平忠雅これに代り、久しからずして、阿部正邦の居城となれり。阿部氏此城に居ること、百六十餘年なりき。現今其城趾は、公園地となり、

天主閣のみ、元の形を殘したり。

阿部氏は、大彦命の後にして、寶永七年（紀元二千三百七十年）正邦下野國宇都宮より移りて、備後の東南部、及び其他を合せて十万石を領し、よく下をめぐみて民を愛したり。四代を經て正精に至る。正精賢明にして、學を好み、書を能くし、菅茶山を用ひぬ。又二代を經て正弘に至る。正弘幕府につかへて、老中となり、寛大にして、人の過失をとがめず、才にしたがひて、能く人を用ひたり。幕府一万石を加賜せり。二代を經て正桓に至り、明治維新となりしかば、領地を朝廷にかへし、朝命を奉じて、猶ほ藩の政事をきゝしに、明治四年東京に移り、華族に列して、伯爵に叙せられたり。

阿部神社は、阿部氏の祖大彦命を、まつれる社にして、文化九年（紀元二千四百七十二年）之を建て、今は縣社たり。

本莊重政

本莊重政は、福山の人にして、産業をおこさん志深く、かつて海邊に出で、其土地をみて、此地、田とすべし、耕作をなすによろしからず若し鹽田とせば、宜しかるべしとて、鹽場を設けたるに、果し

て大に利ありき。又沼隈郡柳津新田を開き、ついで深津新田・高須新田等をも開きたり。其他松永の堤を築きて、鹽場を設け、人をつのりて、其業に就かしめけるに、忽ちにぎはしき地となりぬ。凡そ事をれこすに、中途にして故障起り、遂に功を終はる者少きを、重政は事をおこすに當り、まづ深く考へて、はゞめしかば、中途にして失敗せしことはなしといふ。延寶四年（紀元二千三百三十六年）二月死せり。

宮崎安貞

宮崎安貞は、廣島の人にして、心を農業にそゝぎ、諸國をめぐり、大に農業の法をきはめたり、後筑前の黒田侯に仕へ、或は人の爲に耕作の法を教へ、或は荒れたる土地を開き、又は鹽田をつくる等、産業をおこすを以て務とせり、安貞老年に及び、勸業の志はいよ〳〵固く、遂に實驗して得たる所の、五穀・菜蔬・藥種等の培養法より、鳥獸の飼養法に至るまで、くはしくしるしたる、農業全書十卷を著せり、元祿十年（紀元二千三百五十七年）七月死せり。

唐崎常陸介

唐崎常陸介は、賀茂郡竹原磯宮の神官たりしに、

常に朝廷を尊む志深く、しば〳〵京都・大阪の間を往來し、ひそかに同志の者をかたらひ、殊に勤王の名ある高山正之とは、最も厚く交りけり。後正之筑後國久留米にて自殺せしとき、之を聞くとひとしく、直にはせて、久留米に至り、其墓を祭りしとど歸りて後は、なほ同志とはかり、其志をなさんとせしを、幕府之を知りて、藩主を責めんとせしかば、常陸介大になげきて、終に自殺せり、時に寛政八年（紀元二千四百五十六年）十一月なりき。明治三十一年、朝廷、正四位を贈られたり。

常陸介、かつて、支那の忠臣文天祥の書ける、忠孝の二大字をうつして、石に刻せしめき。此は現に磯宮の境内にありて、忠孝石と云ふ。

賴山陽

賴山陽は、春水の子なり、春水は賀茂郡竹原の人にして、幼より學問を好み、年長ずして京都に學び、業大に進みたり。後淺野氏に仕へて、藩校の教授となりぬ。性篤實にして節儉を守り、又よく貧しきものをめぐみたり、常に行正しくして、妻子も、其れこたれるさまを見ざりきと云ふ。

山陽は幼より學問に志し、勉め勵みてひろく書を讀み、又詩文にたくみなり、學成りて後京都に住み、專ら子弟を教育せしに、其名高くあらはれ、業を受くる者も、多かりき。山陽常に朝廷の衰へさせ給ひて、幕府の盛んなるを歎き、日本外史・日本政記等の書を著して、大に此事を論

頼山陽

じければ、尊王・愛國の風も、漸く世に興るに至りぬ。天保三年（紀元二千四百九十二年）九月死せり。明治二十五年、朝廷其功を追賞して、正四位を贈られけり。

頼杏坪は、春水の弟にして、學問人にすぐれ、淺野氏につかへて三次奉行となり、民をなで、荒地をひらき、孝子・義僕を世にあらはしたる等、頗る功績ありき。

日清戰爭

明治二十七年、朝鮮國に内亂起りしに、清國兵を出だして、之を屬國の如くに扱ひたり、よりて我

國よりも、亦兵を出だし、清國に謀りて、共に朝鮮國をたすけんとしたりしに、清國は、之をきかざるのみならず無禮をさへ加へければ、遂に日清兩國の戰爭を開くに至れり。我天皇陛下深く御心をなやませられ、同じき年九月十五日、大本營を廣島に進められ、舊城内を以て行在所と定め給ひ、文武の百官來たり集り、尋で臨時帝國議會を此地に開き、又陸軍病院を數個所に設けられき。しかのみならず、數万の兵士は、戒嚴して大本營を守り、宇品港には、戰艦常に煙を噴きて舳艫

あひ啣えたる等、實に未曾有の壯觀をきはめたりき。

同じき年十一月十七日、皇太子殿下行啓あらせられき。同じき二十八年三月十九日、皇后陛下も亦行啓あらせられ、親しく陸軍豫備病院に臨ませられて、傷病者を御なぐさめ遊ばされ、且つ多くの御たまものを、めぐませ給へりき、皇恩のありがたきこと、何にたとへんものもなし、同じき年清國遂に和を請ひて、軍をさまり、皇后陛下は四月二十六日に、天皇陛下は二十七日に、御發輦

御還幸遊ばされたりき。

宇品港は、千田貞曉本縣知事たりしとき、廣島の河口水淺くして、船舶の出入甚だ不便なるを憂へ、有志者とはかり、明治十七年より同じき二十二年に至る、六年間を以て、築きたるところなり、氏の此港を築くに當り、種々の困難ありしかども、遂によく此大工事を成就したるは、たゞに此地の幸福のみならず、國家を益することも、亦大なりと云ふべし。

第三章

總說

廣島縣は、安藝・備後の兩國にして、安藝は上古阿岐と稱し、國中を安藝・佐伯・賀茂・豐田・沼田・高宮・山縣・高田の八郡に分ち、國府を今の安藝郡府中村に置かれぬ。其後ときどき郡の分割・廢合ありて、或い十郡となり、または八郡となりたることありしかど、遂に今の如く山縣・佐伯・賀茂・高田・豐田・安藝・安佐の七郡小定められき。

備後は、上古、吉備の一部なり、今の美作・備前・備中・備後を總稱して吉備と云ひしを、後今の如く分

ちたり。當時備後の中を御調・世羅・三谿・三次・惠蘇・奴可・龜石（後に神石と改む）品治・沼隈・安那の十郡とし、國府は、今の蘆品郡國府村に置かれぬ。その後、種々の變遷ありて、十四郡を置かれたること、久しかりしかど、今は比婆・雙三・世羅・神石・御調・申奴・蘆品・沼隈・深安の九郡に改められぬ。

今より七百五十年前（久安二年）平清盛安藝守となりしより、次第に勢を得て、遂に日本全國の政治を支配するに至り、山陰・山陽・南海道の諸國は、概ね平氏の領地となりしを、平氏ほろびて、源氏の所領となりぬ。其後足利將軍の時（五百年前）安藝國は武田氏守護となり、備後國は山名氏守護となれり。夫れより戰國の時代（四百年前）に至りては、毛利元就、吉田より起り、勢漸く強大となりて遂に山陽・山陰の十三個國を有し、孫輝元に至り、周防・長門の二個國を領して、萩城に移れりき。

慶長五年（紀元二千二百六十年）德川氏、福島正則を藝備に封じ、後二十年にして、更に淺野氏を、安藝及び備後北部四十二万六千石に封じ、水野勝成を、備後東南部九万千石、及び備中・相模の若干を合せて、十万

積善館藏版　讀書官藏反

石に封ず。淺野氏は廣島に治し、水野氏は神邊に治し、後福山に移り、松平氏・阿部氏相つぎて、此城に居れり。

明治二年、廣島藩領を廣島藩とし、福山藩領を福山藩とし、各其藩主を藩知事に任じて、政事を司らしめられき。同じき四年に至り、廣島藩を廣島縣と改め、福山藩を福山縣とせられしに、後種々のうつりかはりありて、同じき九年四月、今の如く、安藝・備後の兩國を合せて、廣島縣とゞ定められけり。

文學の事は、廣島藩にありては、天明二年（紀元二千四百四十二年）淺野重晟、城内に學問所を立てたるが始にて、賴春水・春川南濱・加藤椋廬・阪井虎山・金子霜山・木原桑宅等の學者ありて、之が教授となり、藩士の子弟を教育したりき。

福山藩にては、寛政四年（紀元二千四百五十二年）菅茶山、鄉校を安那郡神邊にれこして、生徒を教養し、其後安政元年（紀元二千五百十四年）阿部正弘、福山に誠之館を立て、門田朴齋・五弓雪窓・寺地強平・江木鰐水等の學者を用ひて、藩士の子弟を教育せしめたり。

かく數多の學者、相つぎて出で、各子弟を教育して、人物を出だしゝかども、何れも只、藩士の子弟にとゞまりて、一般のものには及ばざりき。今や到る處、學校の設けあらざるはなく、人民の子弟も、一般に教育せられざるはなし、是れ誠に今上天皇陛下の御恩澤にして、文明の賜ものといふべし、諸君豈に勉めざる可けんや。

廣島縣史談　終

歷史年表

御代	御謚號	紀元前	紀元後	事蹟の大要
一	神武	前元		天皇日向を出で東征し給ふ 天皇橿宮にとゞまり給ふ 天皇大和を平げて即位し給ふ
一〇	崇神		五七三	吉備津彦命を西國に遣し給ふ 吉備を割きて備前備中備後とせらる
一三	成務		七九五	神功皇后三韓を征服し給ふ
一四	仲哀		八六〇	嚴島神社を建つ
三三	推古	一二五三 一二七六		尾道の淨土寺を建立す
四五	聖武		一三九七	天平九年　賀茂郡蘆田郷に國分寺を建立す
五三	淳和		一四八八	天長五年　可部の福王寺を建立す
六〇	醍醐		一五六一	延喜元年　菅原道真九州に下る

六二	村上	一六一二	天暦六年	鞆の福禪寺を建立す、
七六	近衛	一八〇六	久安二年	平清盛安藝守となる
八四	後堀河	一八八一	承久三年	後鳥羽法皇隱岐に下り給ふ
九六	後醍醐	一九九二	元弘二年	櫻山並後鳥兵を擧ぐ
一〇四	後奈良	二二〇一	天文十年	毛利元就武田氏の居城銀山を陷る
		二二一五	弘治元年	毛利元就陶晴賢を嚴島に滅す
一〇五	正親町	二二三一	元亀二年	毛利元就歿す
一〇六	後陽成	二二四九	天正十七年	毛利輝元廣島城を築く
		二二五七	慶長二年	小早川隆景歿す
		二二六〇	慶長五年	毛利輝元廣島を去り福島正則藝備に封ぜらる
一〇七	後水尾	二二七九	元和五年	淺野長晟藝備に封ぜらる 水野勝成備後東南部に封ぜらる
一〇八	明正	二二九二	寛永九年	淺野長治三次に封ぜらる
一一一	靈元	二三三六	延寶四年	本莊重政歿す

文學の事は、廣島藩にありては、天明二年（紀元二千四百四十二年）淺野重晟、城内に學問所を立てたるが始にて、賴春水・香川南濱・加藤椋廬・阪井虎山・金子霜山・木原絲宅等の學者ありて、之が教授となり、藩士の子弟を教育したりき。

福山藩にては、寛政四年（紀元二千四百五十二年）菅茶山、鄕校を安那郡神邊にれこして、生徒を教養し、其後安政元年（紀元二千五百十四年）阿部正弘、福山に誠之館を立て、門田朴齋・五弓雪窓・寺地強平・江木鰐水等の學者を用ひて、藩士の子弟を教育せしめたり。

かく數多の學者、相つぎて出で、各子弟を教育して、人物を出だしゝかども、何れも只藩士の子弟にとゞまりて、一般のものには及ばざりき。今や到る處、學校の設けあらざるはなく、人民の子弟も、一般に教育せられざるはなし、是れ誠に今上天皇陛下の御恩澤にして、文明の賜ものといふべし、諸君豈に勉めざる可けんや。

廣島縣史談 終

歴史年表

御代	御諡號	年代	記元年號	事蹟の大要
一	神武	前前元		天皇日向を出て東征し給ふ 天皇橿宮にとゞまり給ふ 天皇大和を平げて即位し給ふ
一〇	崇神	五七三		吉備津彦命を西國母遣し給ふ 吉備を劃きて備前備中備後とせらる
一三	成務	七九五		神功皇后三韓を征服し給ふ
一四	仲哀	八六〇		嚴島神社を建つ
三三	推古	一二五三 一二七六		尾道の淨土寺を建立す
四五	聖武	一三九七	天平九年	賀茂郡藍田郡に國分寺を建立す
五三	淳和	一四八八	天長五年	可部の福王寺を建立す
六〇	醍醐	一五六一	延喜元年	菅原道真九州に下る

六二	村上	一六一二	天曆六年	鞆の福禪寺を建立す
七六	近衛	一八〇六	久安二年	平清盛安藝守となる
八四	後堀河	一八八一	承久三年	後鳥羽法皇隱岐に下り給ふ
九六	後醍醐	一九九二	元弘二年	櫻山城攻義兵を擧ぐ
一〇四	後奈良	二二〇一	天文十年	毛利元就武田氏の居城銀山を陷る
		二二一五	弘治元年	毛利元就陶晴賢を嚴島に誅す
一〇五	正親町	二二三一	元龜二年	毛利元就歿す
一〇六	後陽成	二二四九	天正十七年	毛利輝元廣島城を築く
		二二五七	慶長二年	小早川隆景歿す
		二二六〇	慶長五年	毛利輝元廣島を去り福島正則藝備に封ぜらる
一〇七	後水尾	二二七九	元和五年	淺野長晟藝備に封ぜらる
				水野勝成備後東南部に封ぜらる
一〇八	明正	二二九二	寛永九年	淺野長治三次に封ぜらる
一一一	靈元	二三三六	延寶四年	本莊重政歿す

一一二	東山	二三五七	元祿十年	宮崎安貞歿す
		二三六〇	元祿十三年	松平忠雅福山城主となる
一一三	中御門	二三七〇	寶永七年	門部正邦福山城主となる
一一八	光格	二四四二	天明二年	藝藩學問所を設く
		二四五二	寛政四年	香川南濱歿す　菅茶山廣校を設く
		二四五六	寛政八年	唐崎常陸介歿す
		二四七〇	文化七年	鵜津神社を建つ
		二四七二	文化九年	門部神社を建つ
		二四七六	文化十三年	頼春水歿す
一一九	仁孝	二四八七	文政十年	菅茶山歿す
		二四九二	天保三年	頼山陽歿す
		二四九四	天保五年	頼杏坪歿す
一二〇	孝明	二五一〇	嘉永三年	坂井虎山歿す
		二五一四	安政元年	福山藩誠之館を建つ
		二五二五	慶應元年	倉子翁山歿す
		二五二六	慶應二年	長州征伐の爲め總督の陣營を廣島に進む

責任編集　宮崎敬介

二五三一	明治四年	縣廳を置かる　百姓一揆あり
二五三三	明治六年	廣島城を以て廣島鎮臺とせらる
二五三六	明治九年	藩制兩國を廣島縣とす
二五四五	明治十八年	天皇陛下廣島嚴島に行幸し給ふ
二五四八	明治二十一年	英に海軍鎮守府を置かる
二五四九	明治二十二年	宇品港落成す
二五五〇	明治二十三年	天皇陛下英及び江田島に行幸し給ふ　山陽鐵道廣島に通ず
二五五四	明治二十七年	日清戰爭に付大本營を廣島に進め給ふ
		臨時帝國議會を廣島に開く
二五五五	明治二十八年	皇太子殿下廣島に行啓し給ふ
		皇后陛下廣島及び英嚴島に行啓し給ふ
二五五八	明治三十一年	日清平和條約成り天皇陛下御還幸遊ばさる
		廣島水道の工事落成す
		山陽鐵道三田尻に通ず

明治三十一年五月十三日印刷
明治三十一年五月十六日發行
明治三十一年十二月十六日訂正再版印刷
明治三十一年十二月十九日發行

定價金拾貳錢

編者　森田保之
廣島市大手町八丁目六拾五番邸

發行者　鈴木常松
廣島市鹽屋町八番邸

發行者　陸路文明
東京市日本橋區通油町拾六番地

發賣所　積善館支店

印刷所　集英堂活版所
東京市麹町區內幸町一丁目五番地

版權所有